

24名の俘虜収容所長

瀬戸 武彦

はじめに

筆者は、平成18年8月26日に徳島市の徳島城博物館で開催された、「徳島におけるドイツ2006—フォーラム〈ドイツ兵俘虜収容所所長松江豊寿の実相を求めて〉」において、「24名の俘虜収容所長」と題して簡単な報告をした。時間的な制約もあって、数名の所長についてしか述べられなかった。尤も、24名の収容所長については、その経歴から生涯に至るまで詳しく分かっている所長から、氏名のみで出身地すら分かっていない所長まで多種多様である。

実はそうした氏名と就任時期しか判明していない所長について、この稿がきっかけとなって、経歴の少しでも判明すればとの思いから本稿を作成した。軍人の場合、将官（少将、中将、大將を意味する）まで昇進した人物は比較的経歴が判明する。しかし、それでも出身地や生没年が不明の場合もある。佐官（少佐、中佐、大佐を意味する）止まりの軍人の場合は、出身地を始めとして殆ど判明していない。

本稿では、収容所長の写真を入手し得る限りで掲載した。その場合、少々不鮮明であっても集合写真を使用した。正装して一人で納まっている写真よりも、複数の人物と一緒に写っている方が、少しでもその人物の人となりになづくことが出来るのでは、との考えからである。

24名の収容所長の中には、ドイツ留学や滞在の経験者が分かる範囲でも数名いる。経歴不明者にも経験者がいるかもしれない。また、陸軍大臣から更には総理大臣にまで上り詰めた人物や、陸軍大將になった者が3名いる。従って、俘虜収容所長はいわば「配所の月」を眺めた軍人、との風説は必ずしも当たってはいないであろう。

久留米収容所是最悪の収容所とのドイツ側の評価（「ドレンクハーン報告」がその原因と考えられる）があるが、それは収容所長による2名のドイツ人俘虜将校殴打事件に起因すると思われる。貴族・階級社会が厳然として存在した時代、将校は特別な待遇で処遇された。このことを考えると、殴打事件は衝撃的な事件であったことは間違いない。

年号としては元号を用いたが、生没年とドイツ人俘虜との関わりでは西暦を併用した。なお本稿は、「チンタオ・ドイツ兵俘虜研究会」のホームページでも公表した「24名の俘虜収容所長」に加筆・修正し、新たに写真を追加したものである。

なお、以下に 16ヶ所の収容所の歴代所長を着任順に記し、初代所長のみ着任前の所属部隊と階級名を記した。後任所長にあつては不明の場合が多いことと煩雑になることから記載を省いた。

俘虜収容所長一覧表

久留米俘虜収容所長：歩兵第 48 連隊附歩兵少佐 檜村弘道、後に真崎甚三郎
歩兵中佐、その後林銑十郎歩兵中佐、高島巳作歩兵中佐、渡辺保治工兵
大佐

熊本俘虜収容所長：歩兵第 13 連隊大隊長歩兵少佐 松木直亮

東京俘虜収容所長：歩兵第 1 連隊附歩兵中佐 侯爵西郷寅太郎

姫路俘虜収容所長：歩兵第 10 連隊附歩兵中佐 野口猪雄次

大阪俘虜収容所長：歩兵第 37 連隊附歩兵中佐 菅沼來

丸亀俘虜収容所長：歩兵第 12 連隊附歩兵中佐 石井彌四郎（後に大佐）、後に
納富廣次歩兵少佐（後に中佐）

松山俘虜収容所長：歩兵第 22 連隊附歩兵中佐 前川讓吉

福岡俘虜収容所長：歩兵第 24 連隊附歩兵中佐 久山又三郎、後に白石通則歩兵
大佐、江口鎮白砲兵中佐

名古屋俘虜収容所長：歩兵第 33 連隊附歩兵中佐 林田一郎、後に中島銑之助
歩兵大佐

徳島俘虜収容所長：歩兵第 62 連隊附歩兵中佐 松江豊寿

静岡俘虜収容所長：歩兵第 34 連隊附歩兵少佐 蓮實鐵太郎、後に嘉悦敏騎兵
大佐

大分俘虜収容所長：歩兵第 72 連隊附歩兵中佐 鹿取彦猪、後に西尾起夫中佐（後
に大佐）

習志野俘虜収容所長：西郷寅太郎中佐（後に大佐）、後に山崎友造砲兵大佐（後
に少将）

青野原俘虜収容所長：野口猪雄次中佐（後に大佐）、後に宮本秀一步兵中佐

似島俘虜収容所長：菅沼來中佐（後に大佐）

板東俘虜収容所長：松江豊寿中佐（後に大佐）

（ ）内で「後に大佐」等と記した場合は、俘虜収容所長在任中での昇進を意味する。

- 1) 西郷寅太郎（1866-1919；慶応3年-大正8年）：鹿児島出身（?）。歩兵第1連隊附歩兵中佐（侯爵）から東京俘虜収容所長となり、またその後習志野俘虜収容所長となった（大正3年11月11日から大正8年1月1日；後に大佐）。岩山イト（糸子）との間に生まれた西郷隆盛の嫡男。明治天皇の思し召して明治18年、19歳の時にポツダムのドイツ陸軍士官学校に留学し、在独期間は13年に及んだ。明治35年に父隆盛の名誉回復なり、侯爵に列せられた。日露戦役では満州で俘虜係りを務めた。なお、俘虜の待遇に関しての西郷所長の談話が残っている。西郷中佐の談「俘虜の月給はクーロー中佐の183円を筆頭として中尉47円、少尉40円、準士官40円、下士以下は日給30銭の規定なるが、右はいずれも我国軍人の各官等に準拠せるものにて、佐官尉官等は当該官等中の第三等級を以って標準となしたるなり。之は日露戦争の当時露国俘虜待遇法と何等異なる所なくいずれも俘虜を遇するにあくまで武人の面目を保たしむるを目途とせる俘虜取扱規定に拠れるものなり。尚右月給中将校以上の者は該月給の範囲内にて衣食住其の他一切の費用を自弁するの義務を有し下士以下は各給料の範囲内を以って当方にて一切の賄いをなし与え、衣食以外の間食又は嗜好品たるみかん、ビスケット、コーヒー、煙草等は希望により適宜現品にて支給する規定なり。以上の如き俘虜収容待遇に要する一切の費用は平和克復後即ち欧州戦乱終息の後において独逸政府之が賠償の義務を有する事勿論にして償金還付時期の戦後一年の後なりや将二年の後なりや不明なるも戦敗の結果疲弊せる独逸が一時に償金還付をなし能はざる節は一定の期間を約して漸次に賠償の義務を果たすこととなるべし」【大正3年11月26日付け『東京朝日新聞』の記事「俘虜待遇の規定」による】。大正8年1月1日午後4時、スペイン風邪で死去。習志野収容所での二人目のスペイン風邪による犠牲者であった。東京・港区の青山墓地（1種イ11号21/22側3番）に墓所がある。〔写真1〕を参照。
- 2) 石井彌四郎（?-?）：出身地不明。歩兵第12連隊附歩兵中佐から初代丸亀俘虜収容所長に就任した（大正3年11月11日から大正5年4月10日；後に大佐）。明治23年7月26日陸軍士官学校卒、明治24年3月26日陸軍少尉任官。明治39年頃歩兵第2連隊第2大隊長。大正2年歩兵第12連隊附中佐となる。大正5年1月21日に大佐に昇任した。同年3月8日から病気のため引き籠もり、やがて休暇を申請した。4月5日、なお引き続き3週間の休暇を請願したところ、4月10日付けで収容所長を免じられて待命となり、納富廣次歩兵少佐が第二代収容所長に就任した。所長退任に

当って、所員やドイツ人俘虜将校と写した記念写真が知られている。どことなく精彩がなく、縮こまった感じがするのは、病み上がりのせいでもあろう。所員及び俘虜将校全員の氏名が判明する集合写真は極めて珍しい【〔写真2〕を参照】。石井はやがて大本教の熱心な信者となり、飯森正芳、及び福中両海軍中佐、篠原国彦陸軍大尉らとともに、過去の経歴・地位を投げ捨てて丹波・綾部の里に移住した。大本教の役員である教監を務めたが、主流派の「大日本修斎会」に対立する「皇道擁護派」とされた。大正9年(1920年)、官憲による大本教への第一次捜査では家宅捜索を受けた。同年12月、大本教の雑誌「神霊界」に論文「吾妻土産」を寄せている。その「吾妻土産」(續)によれば、大正5年4月に軍籍を退いてから、長崎、佐賀、鹿児島、大分の学校を回ってドイツ人の国民性についての講演を行った。また、係累はない、と自ら記している。大正11年(1921年)、石井彌四郎の「皇道擁護団」は大本教から離れたが、その後の消息は不明である。なお、大本教は昭和に入って大弾圧を受けた。【石井彌四郎に関しては、碓大福氏(エスペラント普及会常務理事)、三好鋭郎氏(エスペラント普及会理事)及び小阪清行氏から、嘉悦敏に関しては星昌幸氏から資料等の教示を受けたことを記して感謝申し上げる】。なお、田村一郎「元ドイツ兵俘虜収容所長と「新宗教」(試論)」(所載:『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究』第6号)では、「新宗教」の観点から石井の他に、嘉悦敏、江口鎮白の計3名について触れられているが、真崎甚三郎、林銑十郎、松江豊寿についても関連で言及されている。陸士1期。

- 3) 嘉悦敏(1869-1944; 明治2年-昭和19年): 熊本県出身。第2代静岡俘虜収容所長(大正5年8月18日から大正7年8月25日; 騎兵大佐)。大正7年7月24日陸軍少将。退役後は、霊界研究の道に入った。精神団体「きよめ会」を主宰して、霊界研究で名を挙げたが、特に中年婦人の支持を得た。支持者には代議士夫人高橋むつ子、貴族院議員男爵島津丸夫人で、皇后の母と従姉妹関係にして女官長を務めた島津治子(不敬罪で逮捕された)などがいた。「霊界の神秘」を探求し、人々がいかに明るい希望をもって生きるかを話し合う真面目な会だったと言われる。東京・多磨霊園(9-1-27)に墓碑がある。陸士2期。
- 4) 鹿取彦猪(?-?): 出身地不明。歩兵第72連隊附歩兵中佐から初代大分俘虜収容所長に就任した(大正3年12月3日から大正5年8月18日)。明治26年7月25日陸軍士官学校卒業。明治27年3月7日陸軍少尉。陸士4期。
- 5) 菅沼来(?-?): 出身地不明。歩兵第37連隊附歩兵中佐から大阪俘虜収容

所長に就任し、またその後似島俘虜収容所長に就いた（大正 3 年 11 月 11 日から大正 9 年 4 月 1 日；後に大佐）。蓮實鐵太郎及び松江豊寿とは陸軍士官学校の同期生だった。陸士 5 期。〔写真 3〕を参照。

- 6) 蓮實鐵太郎 (?-?)：出身地不明。歩兵第 34 連隊附歩兵少佐から初代静岡俘虜収容所長に就任した（大正 3 年 12 月 3 日から大正 5 年 8 月 18 日）。菅沼来及び松江豊寿とは陸軍士官学校の同期生だった。陸士 5 期。
- 7) 松江豊寿（1872-1956；明治 5 年 - 昭和 31 年）：福島県出身。歩兵第 62 連隊附歩兵中佐から徳島俘虜収容所長に就任し、その後板東俘虜収容所長に就いた（大正 3 年 12 月 3 日から大正 9 年 4 月 1 日；後に大佐）。明治 5 年 6 月 6 日、旧会津藩士松江久平と妻ノブの長男として会津に生まれる。明治 22 年、16 歳で仙台の陸軍幼年学校入学。25 年陸軍士官学校へ進学し、明治 27 年陸軍歩兵少尉に任官された。明治 37 年大尉となり、韓国駐劄軍司令官長谷川好道大将の副官に任ぜられる。明治 40 年浜松の第 67 連隊附歩兵少佐に昇任。明治 41 年 7 月第 67 連隊大隊長、明治 44 年 11 月第 7 師団副官。大正 3 年 1 月歩兵中佐に昇進、徳島歩兵第 62 連隊附經理委員首座。大正 3 年 12 月 3 日徳島俘虜収容所長、後板東俘虜収容所長。松江所長は俘虜に対して可能な限り最大限の配慮を示し、俘虜による自主的な活動や、近隣住民との交流を許した。その人間味溢れる人柄から、松江所長は俘虜から敬意を払われ、慕われもした。このことから板東収容所は模範的収容所と言われることになった。松江所長のこうした俘虜に対する姿勢は、会津の出身であったその出自に起因するとの考え方も広く言われている。後にドイツでかつての俘虜達により「バンドー会」が結成（1934 年）されたのもこのことを如実に示している。鳴門市ドイツ館には元俘虜から様々な資料が寄せられているのもこうした背景がある。大正 9 年 4 月 1 日第 21 連隊（島根浜田）連隊長。大正 11 年 2 月 8 日陸軍少将に昇進し、5 月 1 日予備役となった。同年 12 月 27 日付けで第 9 代若松市長に就任したが、任期を一年余残した大正 14 年 11 月に辞任した。大正 15 年 5 月末、東京世田谷の粕江に敷地 2000 坪を購入して屋敷を構えた。昭和 31 年 5 月 21 日に死去した。会津若松市の大塚山霊園高巖寺に墓碑がある。松江豊寿に関する文献としては次のものが挙げられる。棟田博『日本人とドイツ人』（『桜とアザミ』の改題）、林啓介『「第九」の里ドイツ村』、横田新『板東収容所長松江豊寿』、中村彰彦『二つの山河』、星亮一『松江豊寿と会津武士道』、木村伸夫『「第九」ニッポン初演物語』、田村一郎『板東俘虜収容所の全貌一所長松江豊寿のめざしたもの』。蓮實鐵太郎及び菅沼来とは陸軍士官

学校の同期生だった。陸士 5 期。〔写真 4〕を参照。

- 8) 山崎友造 (1873-1926; 明治 6 年 - 大正 15 年): 和歌山県出身。第 2 代習志野俘虜収容所長 (大正 8 年 1 月 15 日から大正 9 年 4 月 1 日; 砲兵大佐、後に少将)。明治 6 年、和歌山藩士山崎亀蔵の次男として生まれる。15 歳で旧藩から抜擢されて上京、陸軍幼年学校に入学した。陸軍士官学校を首席で卒業して恩賜の時計を拝受する。大阪砲兵工廠勤務の折、栗山勝三少佐 (後に中将) の次女幸子と結婚。明治 36 年ドイツに留学。大正 5 年 4 月 1 日火工廠宇治火薬製造所長、大正 8 年 1 月 1 日、西郷寅太郎所長の死去を受けて第 2 代習志野俘虜収容所長に就任した。大正 8 年 11 月 15 日陸軍少将に昇進した。大正 9 年 1 月 27 日付の『読売新聞』には、解放された習志野収容所の最後の俘虜となった、マイアー = ヴァルデック元膠州総督と笑顔で握手する山崎少将の写真が掲載された (〔写真 5〕を参照)。【前掲新聞では、握手をするのは俘虜情報局長官竹上常三郎少将と、間違った小見出しが付けられた。しかし、習志野市教育委員会の星昌幸氏によって、竹上常三郎少将ではなく、山崎友造少将であることが解明された。参照: 星昌幸「一枚の写真との格闘—画像探偵術のすすめ」所載: 『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究』(第 4 号、39 ~ 48 頁)】。2005 年夏、ヘルゲン【Wilhelm Helgen (1895-1961): 砲艦ヤーグアル乗員・2 等水兵。東カロリン群島のポナペ島原住民。ポナペ島から技術習得のために青島の造船所に派遣された。日独戦争勃発とともに砲艦ヤーグアルに乗り組んだが、海戦で海に転落した。ドイツの艦船が逃走する中、日本の軍艦に救助され俘虜になった】の息子から大使館を通じて、かつて救助してくれた日本軍艦の艦長や習志野俘虜収容所長への感謝を表すべく墓参の意向が習志野市教育委員会へもたらされた。習志野市教育委員会の星昌幸氏の仲介等により、その年に山崎友造の孫の大東文化大学教授川村千鶴子氏がポナペ島を訪問して、ヘルゲンの息子と対面した。陸士 5 期。
- 9) 江口鎮白 (?-?): 熊本県出身。第 3 代福岡俘虜収容所長 (大正 5 年 11 月 15 日から大正 7 年 4 月 12 日; 砲兵中佐、後に大佐)。大正 6 年 8 月 6 日大佐に昇進した。大正 10 年 7 月 20 日陸軍少将に昇進とともに同日付けで待命となり、同年 11 月 1 日予備役に編入された。予備役となった江口はやがて甥の江口俊博が創始した「手のひら療治の会」を支えた。なお、「手のひら療治の会」は、大正 11 年 3 月に鞍馬山で悟りを開いて「靈氣療法」を創始した白井義男の流れを汲んだものである。この療治は、関東大震災で傷ついた多くの人を救い、一時期は 50 万人の信奉者がいたとされる。そ

の第 2 代会長は牛田従三郎退役海軍少将だった。陸士 6 期。

- 10) 久山又三郎 (?-?)：出身地不明。歩兵第 24 連隊附歩兵中佐から初代福岡俘虜収容所長に就任した（大正 3 年 11 月 11 日から大正 5 年 1 月 14 日）。最終の階級は陸軍大佐。陸士 7 期。
- 11) 白石通則 (?-?)：愛媛県出身。第 2 代福岡俘虜収容所長（大正 5 年 1 月 14 日から大正 5 年 11 月 15 日；歩兵大佐）。大正 9 年 5 月 12 日第 31 旅団長（第 9 師団）、大正 13 年 8 月 20 日旅順要塞司令官。大正 13 年 12 月 15 日陸軍中将。陸士 7 期。
- 12) 林田一郎 (?-?)：熊本県出身。津市の歩兵第 33 連隊附歩兵中佐から初代名古屋俘虜収容所長に就任した（大正 3 年 11 月 11 日から大正 6 年 8 月 6 日；後に大佐）。陸軍大学校 18 期卒。『偕行社記事』502 号（大正 5 年 5 月号）に、「俘虜ヨリ得タル教育資料」と題する手記が掲載された。その内容は「礼節及容儀ニツイテ」、「勤勉ノ徳ニツイテ」、「俘虜ノ常識ニ就テ」、「下士ノ技量ニ就テ」等である【詳細は、校條善夫「名古屋俘虜収容所 覚書Ⅲ」所載：『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究』（第 4 号、70～74 頁）に紹介されている】。大正 6 年 8 月 6 日、名古屋俘虜収容所長から歩兵第 6 連隊長に就いた。「軍隊指揮之研究己～癸編」を作成した。大正 10 年 6 月 3 日陸軍少将に昇進するとともに歩兵第 39 旅団長となった。大正 12 年 9 月 1 日予備役に編入された。陸士 7 期。〔写真 6〕を参照。
- 13) 渡辺保治 (?-?)：大阪府出身。第 5 代久留米俘虜収容所長（大正 7 年 9 月 17 日から大正 9 年 3 月 12 日；工兵大佐）。岸和田藩士渡辺源太の長男として生まれる。弟の正夫は陸軍中将となった。大正 8 年 12 月 16 日、久留米高等女学校生徒に「独逸俘虜に対する感想」について講話を行う【『久留米高等女学校同窓会誌』16 号にそのことが記されている】。陸士 7 期。
- 14) 前川讓吉（1874-1922；明治 7 年 - 大正 11 年）：兵庫県出身。歩兵第 22 連隊附歩兵中佐から松山俘虜収容所長に就任した（大正 3 年 11 月 11 日から大正 6 年 4 月 23 日）。明治 34 年 10 月陸軍大学入校、明治 37 年 2 月 9 日同校中退、明治 39 年 3 月 20 日復校、同年 11 月 28 日陸軍士官学校卒業。大正 6 年 8 月 6 日大佐に昇進し、姫路連隊区司令官、大正 7 年 8 月 19 日歩兵第 6 連隊長となる。大正 10 年 7 月 20 日陸軍少将に昇進するとともに、歩兵第 30 旅団長となった。陸士 8 期。〔写真 7〕を参照。
- 15) 中島銑之助 (?-?)：東京都出身。広島第 5 師団参謀から第 2 代名古屋俘虜収容所長に就任した（大正 6 年 8 月 6 日から大正 9 年 4 月 1 日；歩兵大佐）。陸軍大学校卒。大正 11 年 2 月 8 日陸軍少将に昇進して歩兵第 26 旅

団長。大正 14 年 5 月 25 日予備役に編入された。なお、大正 8 年 6 月 8 日、岐阜県教育会の総会で講演した。その内容は『岐阜県教育』（第 301 号、9 月 30 日と第 303 号、11 月 30 日）に、「俘虜を通じて見た独逸国民性の一部」として上、中、下の 3 回連載で掲載された【詳細は、校條善夫「名古屋俘虜収容所 覚書Ⅲ」所載：『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究』（第 4 号、74～79 頁）に紹介されている】。東京・多磨霊園（14-1-24-7）に墓碑がある。陸士 8 期。〔写真 8〕を参照。

- 16) 納富広治 (?-?)：佐賀県出身。第 2 代丸亀俘虜収容所長（大正 5 年 4 月 10 日から大正 6 年 4 月 21 日；歩兵少佐、後に中佐）。大正 13 年 12 月 15 日陸軍少将に昇進するとともに歩兵第 21 旅団長となった。大正 15 年 3 月 2 日歩兵第 2 旅団長、昭和 2 年 7 月 26 日歩兵第 10 師団司令部附。陸士 8 期。
- 17) 林 銑十郎（1876-1943；明治 9 年 - 昭和 18 年）：石川県出身。第 3 代久留米俘虜収容所長（大正 5 年 11 月 15 日から大正 7 年 7 月 24 日；歩兵中佐）。陸軍大学校卒（第 17 期）。大正 2 年ドイツに留学し、その後イギリス駐在武官を経て、国際連盟陸軍代表となった。大正 14 年歩兵第 2 旅団長、大正 15 年 3 月 2 日東京湾要塞司令官、昭和 2 年 3 月 5 日陸軍大学校長、昭和 4 年近衛師団長を経て、昭和 5 年 12 月 22 日朝鮮軍司令官、昭和 7 年 4 月 11 日陸軍大将に昇進した。昭和 9 年 1 月 23 日陸軍大臣となり、昭和 10 年皇道派の真崎甚三郎教育総監を罷免した。昭和 11 年予備役に編入された。昭和 12 年 2 月 2 日には内閣総理大臣に就いたが、4 ヶ月で総辞職した。林内閣は兼任大臣が多かったので、「二人三脚内閣」と世間からからかわれ、「何にもせんじゅうろう」とも揶揄された。大日本興亜同盟総裁などを務め、昭和 18 年 2 月 4 日、脳溢血で死去した。東京・多磨霊園（16- 1- 3 - 5）に墓碑がある。陸士 8 期。
- 18) 真崎甚三郎（1876-1956；明治 9 年 - 昭和 31 年）：佐賀県出身。第 2 代久留米俘虜収容所長（大正 4 年 5 月 25 日から大正 5 年 11 月 11 日；歩兵中佐）。陸軍大学校卒。明治 44 年（1911 年）年から大正 3（1914 年）年 6 月までドイツに駐在した。大正 5 年（1916 年）4 月 18 日、肺結核兼肋膜炎により久留米衛成病院で死亡したエルンスト・ベスラー（Ernst Boesler）少尉の葬儀に際しては、弔辞を読んだ【〔写真 9〕を参照】。大正 5 年（1916 年）11 月 15 日の大正天皇即位大典の祝いに、俘虜一人につきビール一本とりんご 2 個が配布された。しかしフローリアン（Florian）中尉とベーゼ（Boese）中尉は日独両国が交戦中であることを理由に拒否すると、激怒した真崎所長に殴打された。このことは後に大問題に発展した。久留米収容所

が全 16 ヲ所の収容所の中で、ドイツ側に最も評判が悪い原因は、偏にこの事件によるとも考えられる。大正 12 年陸軍士官学校本科長、大正 15 年同校長となり、尊皇絶対の日本主義による教育につとめ、後の 2.26 事件の首謀者に影響力を与えた。昭和 7 年参謀次長になり皇道派の首領と仰がれた。昭和 8 年 6 月 19 日陸軍大将、次いで教育総監になったが、昭和 10 年林銑十郎陸相により罷免された。このことが 2.26 事件の誘因となった。昭和 11 年の 2.26 事件では、反乱幫助の容疑で軍法会議に付されたが無罪となった。ドイツ留学の経験があり、「ドイツ人にとって音楽は日本人にとっての漬物のようなものだ」と子供に語ったといわれている【『ドイツ兵捕虜と収容生活』（久留米俘虜収容所Ⅳ）4 頁】。陸士 9 期。

- 19) 野口猪雄治 (?-?) : 兵庫県出身 (?). 歩兵第 10 連隊附歩兵中佐から姫路俘虜収容所長に就任し (大正 3 年 11 月 11 日)、大正 4 年 9 月 20 日から大正 6 年 8 月 6 日まで青野原俘虜収容所長に就いた (後に大佐)。先祖は姫路城主酒井家の家臣だった【大津留厚『青野原俘虜収容所の世界』121 頁】。
- 20) 樫村弘道 (?-?) : 出身地不明。歩兵第 48 連隊附歩兵少佐から初代久留米俘虜収容所長に就任した (大正 3 年 10 月 6 日から 4 年 5 月 25 日)。二代目の真崎甚三郎所長時代も所員を務めた。明治 30 年 11 月 29 日陸軍士官学校卒業。明治 31 年 6 月 27 日陸軍少尉。中佐時代には第二浦塩派遣軍委員、更に浦塩派遣軍俘虜委員となった。大正 9 年 4 月 20 日、浦塩派遣軍俘虜委員であった樫村中佐の元に、西伯利 (シベリア) 俘虜救済会から 44613 円 50 銭の寄付金が送られた。同委員会は 大正 8 年 12 月に渋沢栄一、藤山雷太、大岡育造、星野錫の四名と十数社の新聞社を發起人として発足し、革命の起こったロシアで辛酸を嘗めているドイツ及びオーストリア、ハンガリー等の俘虜を救済することが目的であった。俘虜の数としては、ドイツ人 4 万、オーストリア人 10 万、ハンガリー人 8 万、トルコ人 1 万 5000、ブルガリア人 2000 の計 23 万 7000 人とされている【『俘虜ニ関スル書類』（防衛研究所図書館所蔵）より】。陸士 9 期。
- 21) 宮本秀一 (?-?) : 出身地不明。第 2 代青野原俘虜収容所長 (大正 6 年 8 月 6 日から大正 9 年 4 月 1 日; 歩兵中佐)。青野原俘虜収容所で大正 7 年 12 月 14 日から開催された俘虜製作品展覧会に関して、宮本所長が陸軍大臣に提出した展覧会の趣旨説明文の中身が知られている。主要な作品の説明もされている。「灰落とし」については、「わが国の西洋文具店等で売っている紙巻タバコの吸殻入れて、日本式井戸屋根の形をしている」、と紹介し

ている【大津留厚『青野原俘虜収容所の世界』110頁】。なお、この「灰落とし」は現存していて、前掲書100頁にその写真が紹介されている。

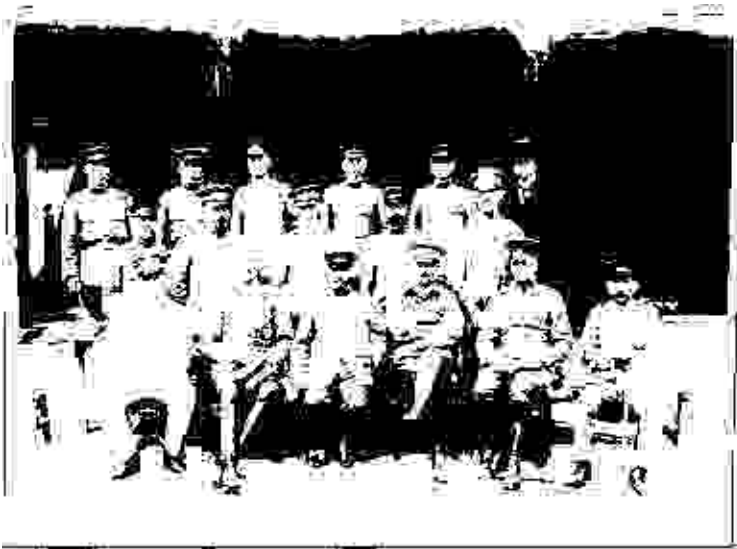
- 22) 高島巳作 (?-?)：出身地不明。第4代久留米俘虜収容所長（大正7年7月24日から9月17日；歩兵中佐）。明治30年11月29日陸軍士官学校卒業。明治31年6月27日陸軍少尉。収容所長在任時の大正7年8月、190名の俘虜が習志野、名古屋、青野原、板東の各収容所へ収容所替えになった。在任期間はごく短期間で、やがてシベリア出兵に派遣された【『ドイツ兵捕虜と収容生活』(久留米俘虜収容所Ⅳ)4頁】。最終階級は大佐。陸士9期。
- 23) 松木直亮 (1876-1940；明治9年-昭和15年)：山口県出身。歩兵第13連隊大隊長から熊本俘虜収容所長に就任した（大正3年11月11日から大正4年6月9日）。周陽学舎、成城学校、陸軍幼年学校を経て陸軍士官学校に進んだ。陸軍大学校卒。明治43年（1910年）6月からドイツ大使館附武官補佐官として明治44年（1911年）10月までドイツに駐在。大正2年7月歩兵13連隊附。大正4年8月歩兵中佐となり、歩兵学校教官を務めた。第一次大戦終結時は陸軍省副官。大正12年8月6日台湾第1守備隊司令官、大正14年5月1日兵器本廠附（作戦資材整備会議幹事長）、大正15年10月1日整備局長、昭和4年8月1日第14師団長、昭和8年8月1日参謀本部附、昭和8年12月20日陸軍大将。東京・多磨霊園（10-1-4-19）に墓碑がある。『欧受大日記』大正十三年三冊之内其一は、ドイツ人戦没者及びその墓地等に関する資料集成でもある。大正11年12月21日付けの陸軍省副官松木直亮（当時）からの照会に対し、翌大正12年1月31日付けで第11師団参謀長浅田良逸は、リーデル（Riedel）と並んで設けられたヘルムート（Hellmuth）の墓碑に刻まれたドイツ語文についての報告をしている。陸士10期。
- 24) 西尾赳夫 (?-?)：出身地不明。第2代大分俘虜収容所長（大正5年8月18日から大正7年8月25日；中佐）。

総理大臣1名（林 銑十郎）、陸軍大臣1名（林 銑十郎）、陸軍大将3名（林 銑十郎、真崎甚三郎、松木直亮）、陸軍中將1名（白石通則）、陸軍少將8名（嘉悦 敏、松江豊寿、山崎友造、江口鎮白、林田一郎、中島銑之助、納富広治、前川讓吉）、佐官止まり12名（?；内、在任中の死去1名；西郷寅太郎）



〔写真 1〕

西郷寅太郎東京及び習志野俘虜收容所長
(習志野市教育委員会提供)



〔写真 2〕 石井彌四郎丸亀俘虜收容所長退任記念写真

前列左より

フリードリヒ・フェッター (Friedrich Vetter) 陸軍中尉

ヴァルデマール・ランセル (Waldemar Lancelle) 陸軍大尉

石井彌四郎收容所長 (陸軍歩兵大佐)

ヴィルヘルム・シュリーカー (Wilhelm Schliecker) 陸軍中尉

ゲオルク・キュールボルン (Georg Kühlborn) 陸軍少尉

亀友廣吉陸軍一等主計

中列左より 山路岩太郎陸軍一等看護長

ボレスラウ・アダムチェフスキー (Boleslau Adamczewski) 陸軍少尉

パウル・オットー・ラーミン (Paul Otto Ramin) 陸軍中尉

市川元治陸軍歩兵中尉

ルードルフ・フォン・シェーンベルク (Rudolf von Schönberg)

陸軍少尉

後列左より 田中一三陸軍軍曹、秋山留吉陸軍軍曹、梅野栄三郎陸軍上等計手

倉本猪三男陸軍二等軍医、里見金二陸軍歩兵中尉、荒川光雄通訳

(鳴門市ドイツ館所蔵)



〔写真 3〕

前列中央が菅沼來大阪及び似島
俘虜収容所長。

(鳴門市ドイツ館所蔵)



〔写真 4〕

前列中央のカイゼル髭の人物が松江
豊寿徳島及び板東俘虜収容所長。

(鳴門市ドイツ館所蔵)



〔写真5〕

帽子を取って笑顔で握手する山崎友造習志野俘虜収容所長。左はマイアー＝ヴァルデック元膠州総督。

この時代の軍人が公的な場面で笑顔を見せて写真に納まっているのは珍しいであろう。山崎少将の人間味のある面を示すものであろう。

（大正9年1月27日付『読売新聞』より）



〔写真6〕

林田一郎初代名古屋俘虜収容所長
校條善夫「名古屋俘虜収容所覚書Ⅲ」
（所載：『青島戦俘虜収容所研究』
第4号、70頁）より。



〔写真7〕

前川讓吉松山俘虜収容所長
（フェーリクス・グレーゴル氏提供）



〔写真 8〕

中央、右足を横に出しているのが中島銃之助名古屋俘虜収容所長。

校條善夫「名古屋俘虜収容所覚書Ⅲ」
（所載：『青島戦俘虜収容所研究』第
4号、64頁）より。



〔写真 9〕

収容中に病死したエルンスト・ベスラー（Ernst Boesler）中尉の葬儀で弔辞を読む真崎甚三郎久留米俘虜収容所長。

（久留米市教育委員会所蔵）